

## 建具

窓、出入り口、間仕切りなどに取り付ける戸、ふすま、障子などを総称して建具といいます。

静岡建具の源流は、浅間神社の造営に際し全国各地から集められた漆工の名工や宮大工、指物師とされています。

木製建具の材質感の美しさは日本建築に欠かすことのできないもので、日本の誇る伝統的な組子模様、透かし彫刻、書院窓、欄間などの装飾加工した木製建具は、建具職人の高度な技術によって製作されたものです。

明治時代に、静岡の鈴木茂三郎は建具の修行を志し、横浜で西洋建具を営んでいた興津のもとに弟子入りをしました。横浜で修行中、現地にあった組合をみて、帰静すると直ちに組合設立に奔走し、仲間の永田喜作とともに市内の職人の勧誘に歩き、明治 34 年 (1901) 頃、組合員 22~3 名の「静岡建具同業組合」が初川新次郎を組合長として設立されました。これが静岡建具における最初の組合です。

仕事が機械類の導入によって機械化されるまでは、どんな仕事もすべて手作業でした。明治 43 年 (1910) に両替町の長谷万次郎が、石油発動機の丸鋸を導入したのが市内の機械化第 1 号です。その後、大正 10 年 (1921) には富士木工が電動の穴彫り機械を導入するなど、静岡は他地域に比べいち早く機械化を進めていました。

富士木工では最も機械化が進み、西洋建具などは当時ほかに製造できるところがなく、地方からの注文が増え、当時の貴族院議事室の建具を手掛けたり、台湾銀行本店の建具や造作、入り口扉の枠も作ったことがありました。

関東大震災の折には、注文の品物が間に合わないほどだったようです。各建具屋で一人あたり 8 本くらいの雨戸を作り大八車で毎日出荷しました。

昭和 21 年 (1946)、「建具家具協同組合」から建具は建築に近いということもあって「静岡建具組合」として独立しました。これが現在の「静岡県建具工業組合」です。

静岡市の「静岡建具組合」は、昭和 33 年 (1958) 中心市街地における防火建築共同店舗を建設するにあたり、組合員 20 名を以て組織されたのが始まりです。